

## 細江カトリック教会だより

復活号

〒750-0016 下関市細江町1-9-15 ☎083-222-2294 📠083-222-0970

ホームページ <http://hosoechurch.sakura.ne.jp>

## 主は生きておられます。

復活祭からはや3週間、主のご復活の喜びは、果たして、日々の生活の中に満ち溢れているのでしょうか。復活節とは言え、主日の典礼で読まれるみ言葉も復活に因むものから、少しずつ主イエスの公生活中の出来事や言葉に移ってきています。時間の経過とともに、復活もどこか過去の事のように、わたしたちの意識から離れていないのでしょうか。

あらためて、復活の主日直後に読まれた聖書朗読箇所を思い出すと、それは、主イエスが墓から立ち上がられた様子ではなく、様々な機会に、弟子たちに姿を現し、ご自分が生きておられることを示す内容だったことに気づかされます。そして、主イエスの昇天までの40日間は、復活された主が、かつて以上に、彼らと共におられることを確信させるための日々だったと言ってよいでしょう。

愛する人と様々な事情で、離れて生活しなければならない人のことを考えればわかりやすいかもしれません。毎日、顔を見、声を聞くことのできた時と違って、意識して様々な方法を使ってかかわりを持ち続けようとするのは当然です。情報技術の発達した現代、直接ではなく、疑似的な体験によって、愛する人を身近に感じることはできるのは事実です。しかし、そのかかわりを深めるためには、しっかりした意志をもたなければなりません。

復活された主とのかかわりも同じです。かつてのようには、目に見えなくなった主とか

かわりを持ち続けるために、弟子たちは何をしたか、そして、初代教会の人々は何をしたか、『使徒言行録』をひも解けば、様々なヒントが得られます。「信者たちは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」。また、「毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していた」とあります。わたしたちが主日に教会に集うのも、全く同じことです。互いに顔を合わせるだけでなく、共に復活された主に向き合い、主が残された恵みを分かち合うこと、それを通して、主が今も、どこにでも、生きておられることを体験するのです。コロナが収束に近づいた今、一層、心がけたいことです。

しかし、復活された主は、かつて大きな傷を受け、十字架につけられた方であることを忘れてはなりません。その傷は、すべて消え去ったわけではなく、わたしたちの共同体の中で、あるいは、世界中で、今も、様々な苦しみを担っている人々の中に残されているのです。主が望まれる真の平和の実現のために、わたしたちの小さな協力を惜しまず、日々を喜びのうちに過ごしてゆきましょう。

作道 宗三 神父

\* 挿入画「エマオの晩餐」

レンブラント・ファン・レイン 作



## ようこそ！ イエズス会神学生

細江教会で中間期（実習期間）を  
過ごすに当たって



イエズス会神学生  
小丹枝 昌哉

細江教会の皆様、初めまして。この度、細江教会で中間期（実習期間）を過ごすことになりました、イエズス会神学生の小丹枝 昌哉（こにし まさや）と申します。私は北海道生まれの北海道育ちで、生まれてから約30年間は北海道十勝の芽室町で過ごしてきました。私の家族や親族はカトリックではありません。浄土真宗大谷派であり、私も幼い頃から家族と一緒に神社やお寺に行く機会がよくありました。札幌経理専門学校を卒業してからは実家に戻り、社会人として約15年間、働いた経験があります。主に食品製造業の仕事を経験しており、明治乳業のカマンベールチーズ製造、JUCOVIA グループのシュレッドチーズ製造に携わりました。

カトリックにはNHKの中世ヨーロッパのテレビ番組を観たことをきっかけに、興味を持って行くようになりました。カトリック柏林台教会やカトリック帯広教会で、教会共同体と毎週日曜日にミサに参加しました。時には子どもたちが教会にお泊りするサマーキャンプを手伝い、羊が放牧されている牧場で教会共同体の仲間たちとジンギスカンを味わったりしました。小さな聖歌隊の一員として歌の奉仕もしました。当時はフランシスコ会（小さき兄弟会）のイタリア人の神父様が主任司祭でした。家庭の事情で洗礼を受けるまで4年間待ちましたが、その間、フランシスコ会の神父様からたくさんのお話を教わりました。現在はイエズス会員として、哲学期と神学期の間にある中間期（実習期間）のために、細江教会に派遣されました。

山口県下関で将来の為に教会司牧実習・カトリック幼稚園・社会司牧実習をすることが決まって、とても嬉しい反面、まだ分からないことばかりの私にどれほどの奉仕をすることができるのか不安があります。まだ手探り状態ではありますが、細江教会で精一杯の奉仕をさせていただきたく思いますので、これからもどうぞよろしくお願い致します。

## 四旬節黙想会

3/12



## 「イエスとサマリアの女」と私

塩谷 朋子

去る3月12日、昨秋叙階された越智直樹神父様（イエズス会）を講師にお迎えした四旬節黙想会に与りました。

当日の福音でもある「ヨハネ4章5節～42節」と、神父様ご自身の叙階記念カードをテキストに、しばし私自身をじっくり見つめる時間を頂くことができました。

先ずモノクロのカードのタイトル「その水をください」は誰が発したもののなのか、という質問から始まりました。この絵の水桶は、サマリアの女がイエスに渡そうとしているのか、イエスが「生きた水」を差し出そうとしているのか、それとも頂いた水をしっかりと抱えているのかとの問いに、私は迷いなく、今イエスの手にあるその水をください...を選びました。この絵の見方は、各人の今現在の心情を表わしているのでしょうか。私は今確かに、イエスの抱えているその水をどうか私にもくださいという思いの中にいます。しかも生きた水、永遠のいのちに至る水が、泉のごとく絶えず湧き出る...その水をくださいと、切に願っています。

神父様は、サマリアの女の「5人の夫」を、私たちが実生活の中で頼みにしているもの（例えば、財産、タレント、体力、年齢、知識、経験など）と言明されました。まさに今私は、無駄に年齢を重ねてきた身を省み、残りの人生をどこに向かって生きていくのか、何を目指し生きるのか、私の真のよりどころとは何か、と改めて自分自身に問いかける日々です。

せめて一滴の水で喉を潤したい、疲れ果て空腹で空ろな人間イエスと、敢えて炎天の正午頃人目を忍んで水を汲むサマリアの女との出会いの瞬間、サマリアの女の生き様を見抜くイエスは、ご自身も人としてあらゆる苦悶の中に身を置いて生きておられるからこそ、彼女の思い煩いを察知され、彼女の心の奥底まで深く思いやることができるのでしょう。

このドラマチックな場面を黙想するとき、いつしかサマリアの女は私と入れ替わり、私は果たしていつも共におられるはずのキリスト・イエスを実感し、キリストに倣う生き方に繋がっているか、再度洗礼のときに出会ったイエスとの「接点」に立ち返るよう導かれます。この社会に集う人々との様々な関わりの「接点」をどのような価値観で広げていくのか、私もイエスの差し出す「生きた水」をしみじみ味わい、日常的に四旬節の荒野の中で試練と迷いに翻弄されているところを潔く突き抜けたいと願うばかりです。

42節にあるように「自分で聞いて信じて」、息も絶え絶えながら、内なる信仰の火種を灯し続けたいとの思いを新たにした春間近の希望と勇気の兆しのひとときでした。



\* ペトロ・カニジオ越智直樹神父さま

司祭叙階記念のカード

## 地区だより IV

### 平和のバトン

山の田地区

昨年来テレビでウクライナ関連のニュースが頻繁に取り上げられるようになり、戦禍による各地の惨状の放映を目にする度、胸のつぶれるような思いを致します。同時に、さきの大戦の時女学校だった私にとって、戦争の体験は貴重な思い出であり、又消し難い過去の災難でした。私は昭和18年に女学校(旧制5年)に入学しましたが、その学校の制服を着て全課目の授業に参加できたのは、一年生の間だけで、19年に二年生になったときは、制服はモンペに変わり、英語と聖書の2課目が削除されました。ミッションスクールでしたし、時局的に当然の事でもありました。

二年生1学期の終わる頃から空襲が始まり、挺身隊とか勤労奉仕などでクラスメートも区々に近郊の農家や工場に派遣されて、級友が一斉に教室で顔を合わせる事がなくなり、授業課目も参加できる日がバラバラで、結局何を勉強したのかさえ、今もって不明です。女学校の数学の授業で、代数、因数分解、三角関数、平方根エトセトラに散々こずり、私にとって数式は見るだけで拒否反応がおこる学科でした。小学校の時習得した算数はともかく、そもそも私の人生に微分積分など必要ない(これは正解でした)と勝手に断じてみたものの、テキストがあるので仕方なく勉強致しました。

スマホやメールなどがある現代と違い、通信手段は手紙だけだった当時、友人との交遊はもっぱら手紙で、中々会えない相手とお互いによく手紙を書きました。手紙といっても、切手を貼って投函するのではなく、連絡とか約束など、たあいのない事を書きなぐって、包装紙などで作った手製の封筒に入れて、会った時に手渡したり、相手の机の引出しや、下足棚に入れたりして、友情を深めていました。その頃女学生の間で封書のメに $\sqrt{2}$ を書くのが流行っていて、ヒトヨヒトヨニヒトミゴロは、

数学の嫌いな私の記憶にたった一つ残っている平方根です。こうして書きながら、あの戦時下で、今風の言葉でいえば、中々オシャレだったなあという感想をもちました。

あれからもう80年近く経ちました。数年前、先頃故人となられた旧知のシスターと雑談した折、その頃の私の気分で愚痴まじりに「私は逆縁で年下の者を多く見送り、今ひとりになって、体力や気力が衰えたら長生きしても何の意味もないし、無駄に年を重ねているようで気がめいます」と言った時、そのシスターが少し気色ばんで、「神さまがお造りになったもので、無駄な物や無意味な事などひとつもありませんよ」と云われた言葉が、記憶の薄れが進む私の脳裏にまだ鮮明に残っています。

入信して60余年、自分が創造主による被造物でかけがえのない存在と自覚しながら、生活の中でキリスト者としての確信や自覚が、実にしばしば消失します。それでも神は共にいて愛して下さい。今私は心よりの感謝をこめて創造主のみわざと復活されたキリストを賛美してお祈りします。

“主は甦へり給へり” アレルヤ アレルヤ。

森 正子

## 枝の主日(4/2) ~ ご復活(4/9)

:枝の主日: 森晃太郎助祭と共に...



:聖木曜日: 最後の晩餐



:聖金曜日: 主の受難



:聖土曜日: 復活の聖なる徹夜祭



:復活の主日:

作道神父さまは3月24日に叙階50周年を迎えました。おめでとうございます!

この日、ベトナムチームが神父さまにお祝いの花束を。これまで、様々な出来事を乗り越えて歩まれた神父さまに、感謝と祈りをお捧げしましょう。



少しコロナが落ち着いたこの頃、やっと小さな茶話会ができました。ベトナムチームが飲み物を用意して、少しのお菓子で分かち合いました。それでも何とか・・・喜び合えて良かったと思っています。

青年たちはみんな考えて、教会建替えの力になろうと頑張ってくれています。日本で働きながら勉強していますが、共に分かち合う場所がこの教会、このセンターです。

教会はみんなの家であり、外国の方々も同じ家でもあるのです。復活したイエスさまが寄り添ってくださっているのです。

心に喜びを持って、共に生きていきたい。

(復活節に寄せて・・・)